



(徳島)

## 徳島・常三島遺跡

じょうさんじま

- 1 所在地 徳島市南常三島町二丁目  
2 調査期間 一 一九九五年（平7）八月～一九九六年三月  
二 一九九六年六月～八月  
三 一九九六年七月～一月

- 3 発掘機関 徳島大学埋蔵文化財調査室

- 4 調査担当者 橋本達也  
5 遺跡の種類 城下町（武家屋敷）跡  
6 遺跡の年代 江戸時代（一八世紀～幕末主体）  
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は徳島城の北端を  
流れる助任川をはさんで、  
城の北東に位置する。一は  
徳島大学工学部光応用工学  
科棟の新築、二は工学部サ  
テライト・ベンチャード・ビ  
ジネス・ラボラトリの新  
築、三は工学部機械工学科  
棟の新築に伴う調査である。

「常三島」は蜂須賀入部以来一七世紀前葉ごろまでは、舟入とし  
て、「阿波水軍」の根拠地となっていたと伝えられており、干渴の  
ような様相を呈していたが、元和元年（一六一五）の一国一城令な  
ど諸般の事情により武家屋敷地が必要となり、新たに造成されたも  
のである。したがって、遺構はこの時期以降となるが、一八世紀後  
葉から一九世紀にかけての遺物が多い。木簡出土遺構の時期決定は、  
整理途上のため十分ではないが、右の間に使用・廃棄されたことは  
まちがいない。

屋敷地内からは多数の遺構が検出されているものの、木製品は、  
屋敷境を区画する用排水路からもつとも多く出土する。この溝は、  
それまで小規模であったものが、一八世紀後半に洪水対策として、  
二条の大規模な溝に作り替えられたものである。なお、もともと干  
渴を造成した土地のため、今日でも地下水位が高く、概して木製品  
の残存状況は良好である。

木簡は、一の調査で六点（溝SD〇三から一点、溝SD〇四から四点、  
土坑SK六九から一点）、二の調査で三点（土坑SK〇三・土坑SK一二・  
土坑SK六〇一から各一点）、三の調査で二点（土坑SK四四一・土坑  
SK六〇一から各一点）出土した。今回はそのうち解読可能なものと  
して、一の調査で溝SD〇四から出土したうちの二点と、二の調査  
で土坑SK〇三から出土した一点を紹介する。溝SD〇四は屋敷地  
区画の用排水路、土坑SK〇三は屋敷地内のゴミ穴と考えられる。

## 一 光応用工学科棟地点

(1) 「牧安太郎殿」

188×34×2 011

(2) 「大江山

いく乃、道の  
とをければ」・「五拾九  
小式部内侍」

79×49×3 061

(1)は板目材で、上下とも切り折り。品目は書かれていらないが、荷札木簡と思われる。屋敷を区画する溝からの出土である。寛政八年（一七九六）の御山下絵図によると、「牧梶五郎」の屋敷と記されている。牧家の記録としては「梶五郎」名の記録しか残っておらず、この「安太郎」が当主の名前であるかは不明である。(2)は板目材を上下左右とも丁寧に切断し、長方形に仕上げている。かるた小倉百人一首の五九番、小式部内侍の読み札である。これも(1)と同じ溝からの出土で、牧家の持ち物であった可能性が高い。

## 二 工学部サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリ地点

(1) 「かなしけれ」  
・「」 1十三

63×(19)×4 061

右側三分の一ほどが欠損しているが、(2)と同様の作りである。  
同じく百人一首で、一二三番大江千里の読み札である。

なお、釈読にあたっては徳島県教育委員会文化財課の福家清司氏、  
徳島市立徳島城博物館の根津寿夫氏の教示を得た。

(中村 豊)

